



39名の卒業生

帝京大学小学校 校長 石井卓之

3月14日、39名の6年生が卒業していきました。私が帝京大学小学校に着任した年に入学したメンバーです。コロナのために全国一斉休校となり、前代未聞のオンラン入学式を実施しました。制服を着て、画面越しに担任発表を行い、その後の授業は教材を自宅に送って実施しました。体育や図工、音楽も画面を通して行ったので、難しい面もたくさんありました。その経験が土台となり、帝京小がICTの進んだ学校になれたのだと考えています。



卒業生には式辞の中で、「チャレンジ」という話をしました。以下はその要約です。

これからの社会は変化が激しく、そのスピードも加速していくはずで、職業はさらに多様化し、価値観も大きく揺らぐかもしれません。しかし、どんなに社会が変わっても自分から挑戦していくことで、身の回りの環境を変えることは可能だと思います。チャレンジ精神を忘れないください。

そのためにはまず、「自分で自分の限界を決めない」ことです。それを決めた瞬間、皆さんの限界は決まってしまう。中学校では、色々なことを試して、楽しんでほしいと思

います。継続していくことで、できることは増えていき、できることのラインはどんどん高まっていきます。

次に、「失敗を楽しむ」感覚をもってください。失敗を恐れると挑戦する意欲は半減します。失敗の中にこそ、成功するためのタネがあります。どうすれば次回はうまくいくのかを楽しみながら考えてください。

さらに、「他者を頼り、力を借りる」ことを否定しないでください。自分でできることは限られています。自分にはない力をもっている他者の力を借りて、成功の階段を登ってください。

最後に、「努力を継続する」ことです。継続している人の前には必ずチャンスが現れ、それに気づくことができます。帝京小で身に付けた力に自信をもって、中学校生活をスタートしてください。

式に参列した5年生の態度も立派でした。6年生を送り出す気持ちが、私のいる壇上からも感じられました。「来年は自分」という意識も伝わってきました。伝統はこうして引き継がれていきます。

職員室の窓

体育館の横には、冬の季節に花を咲かせ初夏に黄色の実をつける枇杷（ビワ）の木があります。実が熟するのを待っているのは、子供たちだけではありません。早くから、高くから観ているクラスたちが、頃合いを見て人がいない土日に行動を開始。毎年月曜日には空っぽの樹だけが残され、がっかりさせられます。他にも、柚子や柿・クリ・夏みかん・かりん・グミ・桃といった実のなる樹があります。多くは校舎裏側にあり、日当たりの関係からか、実がなるまでに年数がかかりました。去年は夏みかんがたわわに実のりました。温州ミカンも実をつけましたが、残念なことに3本のうち2本が枯れてしまいました。6年生から「実がなる」貴重な体験ができるようにと、温州ミカンの樹を卒業記念にいただきました。成長を楽しみにしています。



《副校長 澁谷恵美子》